

2021年11月9日 記者会見 質疑応答（神戸）

発表内容：2022年03月期 中間決算について

日 時：2021年11月9日（火） 16時00分～16時37分

場 所：みなと銀行 本店

発表者：関西みらいフィナンシャルグループ 代表取締役

西山 和宏

みなと銀行 代表取締役社長

武市 寿一

みなと銀行 常務執行役員

藤本 剛

【質疑応答】

Q. 5年ぶりに中間決算での増益となった一番の要因は役務取引の増加ということで、中でも個人向けではファンドラップと投信があったと思う。投信販売の伸びはネット経由のものが多かったということだが、ノーロードの商品が増えて販売手数料が取りにくいような状況になっている中で、今後も収益につながる流れは続くのか？それとも、これからは厳しく全体の底上げをしないといけないものとして考えているのか？

A. （武市）

資産形成ビジネスについては、販売手数料ではなく、残高を積み上げたうえでのストックフィーで収益をあげていくのが今後の流れと考えています。ファンドラップではいわゆる販売時の手数料は頂いていません。残高に伴う信託報酬のみという形になっており、今後もこの流れは加速していくと考えています。我々も販売手数料より残高の積み上げによるストックフィーの拡大を目指しています。投資信託そのものは販売手数料をいただいておりますが、ファンドラップを中心とした残高のウェイトを高めることで信託報酬（22/3 中間期 7.7 億円）を増やしていくという考え方です。

Q. 与信費用について、コロナの影響が7割ぐらい占めているということだが、与信費用自体はコロナで大変だった昨年とほぼ同規模ということは、通常より高い水準と理解してよいか？

A. （武市）

昨年度から いわゆる「ゼロゼロ融資」も含めて資金供給はしっかりやってきたことから、倒産件数はそれほど多くなく、業績に影響を受けていない企業も多くあります。ただ、宿泊業や飲食業を中心に非常に大きいダメージを受けている企業がたくさんあることは事実です。そういう意味で、与信費用が今後も大きく発生するとは考えていませんが、やや予防的と言いましょうか、前年度と同水準程度で考えております。

Q. 各地域金融機関が経営基盤の強化に取り組んでいるが、みなと銀行のOHRが70%台に回復したことについて、収益増強や経費削減にどのように取り組んだのか？

A. (武市)

トップラインでは二つあります。一点目は、いわゆるストックフィーを積み上げることに注力してきました。一時的なものではなくて、持続的にトップラインが増益になるように取り組んできたということです。二点目は、法人分野で県民銀行として兵庫県でのみなと銀行のシェアを上げることに取り組んでおり、順調に上昇してきています。この上期に限って言うと、貸出金自体は大きく増えたわけではありませんが、みなと銀行の強みをしっかり打ち出してお客さまにアプローチができたと理解しています。

また、経費の面では、メガバンクなどが経営資源を県外へシフトしている状況にあって、その受け皿として、今後も店舗はしっかり維持していきたいと考えています。そのために、運営体制の工夫をしており、例えば本部機能では関西みらいFG全体で一体運営を実施し、営業店では近隣の支店は支店長兼務店にするなど、きめ細かな一体運営により人員の削減を図っています。

Q. 人員削減のところで、中計通りに進捗しすでに達成しているということですが、今後もさらに続けるのか、あるいは一定程度達成したと考えているのか。

A. (武市)

人員の削減は中計を前倒しで達成しました。このピッチでさらに削減ができるとは思ってはいません。ただし、さらに本部の運営を関西みらいFGと共同で実施するなど、運営体制の見直しができる場所もまだあると考えており、さらなる削減を検討しています。

Q. 昨日、関西みらいFGとして池田泉州と滋賀銀行に開放する発表があった。みなと銀行にとってはこれまでのSMBCとの関わりもあるが、今後は関西みらいFGと一体化した動きになるのか？ みなと銀行とSMBCのATM相互開放については、今後どのようなになるのか？

A. (武市)

昨日発表された池田泉州と滋賀銀行との提携は、関西みらい銀行としての提携であり、みなと銀行が関わっているものではありません。ATMの相互開放については、兵庫県のマーケットにおいて、SMBCと相互に開放していることはお客さまにとってメリットが非常に大きいことから、弊社としてはこの状況を変える必然性は全くないと考えています。SMBCとの相互開放は、元々の資本関係があったからと捉えられがちですが、SMBCはMUFGとも相互開放しています。銀行側にとってATM台数の削減やコスト削減効果、それからお客さまのメリットを考えて実施しており、解消するということは非常に考えにくいのではないかと個人的には感じています。

以上